保育園施設の建築計画の実態と 保育室の使われ方に関する調査 報告

A STUDY ON THE FACILITY CONDITION AND SPACE UTILIZATION OF CONTEMPORARY NURSERY SCHOOL

山田恵美 —— *1 服部岑生 —— *2

Emi YAMADA —— *1 Mineki HATTORI —— *2

キーワード：
保育園, 地域施設, コーナー, 食・寝・遊の分離

Keywords:
Nursery school, Regional facilities, Play corner, Space utilization, Spacial separation of eating, sleep and play

This study aims at grasping the general condition of spacial environment in which nursery school children would grow. In this paper the basic data of buildings, nursery rooms, extra spaces and spaces open for local residents are described and some points that should be reminded when planning nursery schools are analysed.

1. はじめに

他者とうまく関われない子どもが増えていることが、社会問題として捉えられている。保育園は子どもが最も早い段階で他者の中で社会性を身につける環境を提供しているといえる。保育園に通う子ども達は、多くの場合両親が働いている家庭環境はもちろんだが、保育士や友達のいる保育園の人的環境および、保育の形態に合わせた園舎や保育室の使い方から少なからぬ影響を受けているだろう。その意味で、保育園の研究が、大きな社会的意義を持つと考えられる。

そこで本研究^{注1}では、園児が育ち、他者との関係性をはぐくむ施設環境を総合的に調査し、施設の実態の把握を試みた。本稿ではこのうち、園児がさまざまな立場の大人および他の園児と関わる環境の基礎である園舎や保育室、さらに昨今の地域との関わりを強める新しい動きとしての子育て支援のスペースに関する部分を、主に園長と保育士への質問の中から報告する。

2. 調査概要

調査は、関東一都六県にある公立および私立の保育園計89園を対象に平成15年7月末から8月にかけて実施した。調査対象園は、当該地区の自治体の中から系統抽出した25の市区町村にある保育園の中から協力の得られる園を抽出した。調査票は表1の4種類

表1 調査票の種類および回収率

内 容	回収率 (%)
園 長 票 園長が保育園の設置・運営状況等を回答	75人 (84.3) 公立32人/私立43人
保育士票 保育士が自分の就労状況等を回答	1107人 (65.5)
子ども票 担任の保育士が子どもの保育園での様子を回答	6489人 (73.0)
保護者票 子どもを迎えにくる保護者1名が、家庭での子育ての状況を回答	5009人 (60.5)

を各保育園に送り、回収は厳封の上で保育園ごとにまとめて再び郵送してもらう形で行なった。回収率は保育園単位で89園のうち79園（有効回収率88.8%）だった^{注2}。

3. 保育園の面積および階数

3-1 基礎的データ

まずはじめに、保育園の敷地面積および延べ床面積は図1-a・bに示す通りであるが、残念ながら今回の調査では園庭面積のデータは得られていない。敷地面積はそのまま園庭の面積と比例するものではなく、保育園の条件は様々であるため、単純にこれらの数値を比較はできないが、面積を定員数で割って園児1人あたりの敷地面積および床面積を算出したものが図1-c・dである。

園舎の階数は園児一人あたりの敷地面積が小さくなるほど上に積むことで床面積を確保している（表2）。公設の場合には半数以上が1階建てで2階建てまでしか見られないが、民設の場合には約半数が2階建てで、3階建てや4階建てもみられた（図2）。13階建ての事例は他の福祉施設と複合化されたものである。公設民営の動きのように、私立保育園の増加に頼る動きがある中、今後は2階建て以上の多層建築が増えていくことが予想される。複数階建てになると、乳児室をどの階に置くかが検討課題となるが、実際の設置階に年齢による差はほとんど見られなかった（表3）。

3-2 面積と地域施設の利用

保育園では、園児は日中のほとんどの時間を保育園内で過ごすわけであるが、普段の保育で利用している施設（屋内）と公園等（屋外）が何箇所あるかを尋ねた結果が図3である。屋内施設につ

*1 千葉大学大学院自然科学研究科 博士後期課程
(〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33)

*2 千葉大学大学院自然科学研究科 教授・工博

*1 Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Chiba Univ.

*2 Prof., Graduate School of Science and Technology, Chiba Univ., Dr. Eng.

いては、約4分の1の園が利用していないという回答で、その他もほぼ3カ所以内と利用が限定されていた。一方で屋外の公園等は8割の保育園が利用していて、その数には1カ所から10カ所以上まで幅が大きかった。その理由には、当然近くにどれだけ利用できる屋外スペースがあるかという地域性の違いもあるが、散歩などで園外に出る際のルート選択の範囲や保育園がこうした屋外スペースの利用をどの程度意識しているかが表われてくる。特に敷地面積が小さい場合には園庭も小さいことが多く、それを補うために積極的に公園等を利用していると考えられる。実際に、表4に示すように園児一人あたりの敷地面積と利用している公園の数および一ヶ月の公園利用頻度の間には、微弱ながら負の相関がみられ、園児の遊ぶ屋外空間が園内に確保できていない園ほどよく地域の屋外空間を利用しているといえる。

また、よく利用する施設・公園等を尋ねたところ、屋内施設は利用されている種類も様々だが、屋外については圧倒的に公園の利用が多かった。これは山・川・海などの自然の中で遊ぶことよりも、日常的に子ども達が思いっきり体を動かして遊べる環境を公園の利用で補っていることを示しているのではないだろうか。広さや安全性に加えて、子ども用の遊具の存在も影響している可能性も高い。よく利用されている屋外空間までの距離は500m以内で、子どもと歩いて10分以内のところが半数以上を占めていた。

4. 保育室以外の保育スペース

保育園には園児が所属するクラスの保育室の他にもクラスや年齢を超えて共用している部屋や通路などのスペースがある。通路のタイプを、傾向を示すためにパターン化したものが図4である。「片廊下型」と「テラス型」は一見よく似ているが、片廊下型が主に保育室の北側に通路としての空間が確保されているのに対して、テラス型は日当たりのよい南側に通路が設けられ、活動の場所としても使われる可能性の高そうなものとした。「ホール型」はいわゆる廊下ではなくホールのように活動の場所として積極的に計画された広めのスペースから保育室に出入りする形、「階段ホール型」は階段周りのスペースを介して保育室に出入りする形である。階段ホールは絵本コーナーなどの小規模なコーナーが設けられるなど、有効に使われる傾向がある。

これらのパターンの各割合を示したものが図5である。1階建て・複数階建てともに半数以上が片廊下型で、1階建てではこれとテラス型とで9割以上を占めたが、1階建てでもホール型などもみられる。表5は各通路パターンごとの園児1人あたり床面積の平均を出したものであるが、平面が似ている「テラス型」と「片廊下型」をみると「テラス型」の方が明らかに面積が小さい。このことから、移動のための空間を活動空間に取り込んでいる「テラス型」の性格が理解できるだろう。一方で、「ホール型」をみると他のタイプよりも床面積に余裕がみられる。

ところで、ホール（遊戯室）の確保状況を見ると71.9%が遊戯室を確保していたが、17.5%はホールを普段はクラス保育室として使用していて、8.8%はホールがなく、またホールという大きな空間ではなく多目的な予備室がある園が1.8%だった（図6）。さらにホールでの活動内容（図7）をみると、行事やその練習・体を使った課題遊びを挙げた園がやはり多かったものの、半数以上

図1 保育園の面積に関する基礎データ

図2 園舎の階数

表2 園舎の階数と園児一人あたりの敷地面積

	10㎡未満	10~20㎡	20~30㎡	30㎡以上
1階建て	0	7	3	13
2階建て	7	18	5	2
3階建て	3	0	0	0

n=59

表3 年齢別の保育室の設置階

(%)	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	一時保育
1階	60.7	48.0	50.0	48.0	48.0	48.0	50.0
2階	35.7	40.0	46.2	44.0	48.0	48.0	33.3
1・2階	0.0	8.0	0.0	4.0	0.0	0.0	0.0
3階	3.6	4.0	3.8	4.0	4.0	4.0	4.0

(園舎が2階建て以上の場合について)

図3 普通の保育で利用している施設(屋内)と公園等(屋外)

表4 園児一人あたりの敷地面積と公園の利用との関係

	Pearsonの相関係数	有意確立(両側)
利用している公園数	-0.418**	0.002
1月あたりの公園利用頻度	-0.442*	0.013

* $p<.05$ ** $p<.01$

図4 園舎の通路パターン分類

図5 園舎の通路パターン

表5 園舎の通路パターンごとにみた園児一人あたりの床面積平均

(㎡)	1階建て	2階建て	3階建て	全体
片廊下型	7.50	7.33	4.69	7.22
テラス・南廊下型	5.98	5.03	—	5.79
ホール型	9.82	10.71	—	10.26
階段ホール型	—	7.42	—	7.42
その他	12.40	6.30	—	8.34
全体	7.29	7.18	4.69	7.13

がそれ以外の課題遊びを挙げていて、必ずしも大空間を要さない活動にも使われていることがうかがえる。また、午睡や食事の場所として利用することで食べる・寝る・遊ぶスペースを分離しているケースも多数見られる。地域の親子支援という比較的新しい内容もみられた。

こうしたホール使用の実態をみると、行事の際に広く使える工夫は必要であっても、それ以上に日常に重きをおいた計画が求められているといえるだろう。寝る場所、食べる場所として大きな空間は果たしてふさわしいのか、また運動・遊びや交流の場としても、保育園児の活動に高い天井が必要なのかは疑問が残る。実際に、ホールを普段は保育室に充てている園や、保育室間の可動間仕切りを外すことで広い空間として利用できる園もみられた。広さが必要な行事は近隣の学校や地域施設のホールを利用することも視野に入れて考えることが必要だろう。

いずれにしても、動線のための空間を最小限に留める工夫とともに、テラス型・ホール型などは逆にこうした空間を活動の場として取り込めるよう考慮した結果と捉えられるだろう。

5. 保育室の使い方

図8は保育室内の家具の置き方で気をつけていることを保育士に訊いたものを、担当クラスの年齢別に集計したものである^{注3}。保育士の意識には年齢による差はあまりみられず、わずかながら年齢が上がるほど子どもの視点にたった「やりたいことが見つけやすいように見通しよく」という回答が増える傾向はあるものの、とにかく見通しのよさが優先されている現状が浮き彫りとなった。

保育室の主な使い方では、圧倒的に「部屋を広く使えるように基本的にテーブルなどは使い終わったら片付ける」というクラスが多かったが、年齢が上がるにつれて「テーブルとイスだけはいたいいつも出してある」というクラスが増え、「テーブル・イスの他にも壁際以外に家具を設置してあることが多い」という割合も増える傾向にある(図9)^{注3・注4}。遊びのスペースのとり方をみると、遊びのコーナーの設置率は年齢が上がると共に高くなっている(図10)^{注3・注4}。0歳児・1歳児クラスでは60%以上が「特に遊びのコーナーというのはい設けていない」が、2歳児以上のクラスになると、「遊ぶための場所だけは仕切っていることが多い」と「おもちゃや工作の材料・道具などが置かれているコーナーを設置している」を合わせるとコーナーを特に設けていないケースとほぼ半々である。

図11は食・寝・遊のスペースの分離傾向と園児1人あたりの床面積との関係を示しているが、食堂や午睡室などの「別室」を設

図6 ホールの確保状況

図7 ホールでの活動内容

図8 家具の高さや配置で気をつけていること^{注3}

図9 保育室の主な使い方^{注3}

図10 遊びのスペースのとりかた^{注3}

図11 食・寝・遊のスペースの分離傾向と園児一人あたりの床面積

図12 午睡のスペースと保護者の保育施設に対する満足度^{注4}

図13 食事のスペースと保護者の保育施設に対する満足度^{注4}

けている場合には床面積にもゆとりがあるが、保育室内でスペースを分離している度合いと床面積との関係性は薄い。つまり、今の保育園の水準であれば、保育室内のコーナー化は可能であるといえるだろう。また、保護者の施設整備面に対する満足度と午睡・食事のスペースのとり方との関係を見ると（図12・13）^{注5}、スペースが分離していなかったり、テーブルを兼用している場合に満足度が下がっている。これに対し、保育室内で午睡や食事のスペースが確保されている場合は、午睡室や食堂がある場合とほぼ似たような結果となっている。

6. 地域への支援スペース

地域の親子への支援は近年保育園の役割の一つとして定着しつつあり、自治体からの委託事業としての子育て支援センターを設置する園でなくても、独自の自主事業として多様な支援が実施されている^{注6}。親子支援の活動場所と園児の活動場所との関係は、完全に兼用している園が4分の3を超え、一部兼用と合わせると9割が兼用していて、完全に独立した親子支援のスペースがある園はほとんどみられなかった（図14）。保育園における子育て支援自体が比較的新しい概念であり、特に自主事業の場合には既存の園舎の中にその活動場所を確保せざるを得ない状況がうかがえる。実際に親子支援で使われている部屋をみると（図15）、ホール・遊戯室が最も多く54.8%みられ、ほかに絵本・図書コーナーや食堂、

図14 地域の親子支援と園児の活動場所

図15 親子支援で使われている部屋

図16 来援した地域の親子の活動場所と動線

図17 地域の親子の出入り口

表6 送り迎え時のクラス別出入り口

送り迎え時 (%)	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
クラスの保育室から直接	49.1	61.4	63.8	66.7	66.7	68.2
保育室とは独立した玄関から	50.9	41.4	33.3	30.3	28.8	27.3
その他の場所から	3.5	2.9	4.3	4.5	6.1	6.1

表7 園庭に出るときにのクラス別出入り口

園庭に出るとき (%)	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
クラスの保育室から直接	63.8	74.3	78.3	74.6	76.1	77.6
保育室とは独立した玄関から	3.0	25.7	18.8	23.9	20.9	19.4
その他の場所から	6.9	5.7	7.2	4.5	6.0	6.0

予備室などが使われていた。これらの部屋は、ほとんどが園児が使っていない時間帯に利用されていると考えられるが、保育室（16.1%）、園舎全体（12.9%）という園もみられた。不特定の人間が園内に入ることにに対して安全・防犯面から問題視する声もあったが、図16をみると実際には「園児の活動と一緒に入ってもらう」園が半数を超え、むしろ積極的に地域の親子と園児の交流を意図している園も多い。

また来園した親子の出入り口に関しても、園児の活動への影響を懸念したり、人の出入りをチェックする観点から、専用の玄関が必要だとする意見もある。実際には設けられるケースは希で、「活動に使っている部屋から出入りしてもらい（37.6%）」「園児と同じ玄関から出入りしてもらい（28.2%）」「職員用の玄関から出入りしてもらい（27.1%）」の順に多かった（図17）。さらに表6、7をみると園児は送り迎えの際には保育室とは独立した玄関を利用しているが、保育時間中に園庭に出る際には7割が保育室から直接出入りしていて、地域の親子が園児と同じ玄関から出入りした場合にも、その影響は少ないと考えてよいのではないだろうか。

7. まとめ

- ①ホールは午睡や食事の場として、普段の遊びの場としてもよく使われ、行事などよりも日常に重きを置いた計画が求められる。また、保育室内の食・寝・遊スペースの分離は、一人あたりの床面積によらず、年齢が上がるほどテーブル・イスの常設率、遊びコーナーの確保率ともに高くなっており、こうした場の性格づけで園での日常「生活」において子どもが活動や仲間を自ら選び関わっていく可能性は広がるのではない。
- ②地域の屋外施設利用は大半の園にみられ、また地域の親子支援のスペースは、懸念する意見があるほどには必ずしも園児のスペースと分けることが求められるわけではない。園児が地域に出て行くことと、地域の人を園に招き入れることの両方の面に多様な関係性をはぐむきっかけを見出せる。

謝辞

本研究の調査にあたってご協力いただいた自治体および回答に協力して下さった公立・私立保育園の園長、保育士の方々、保護者の方々に深く感謝いたしますと共に、研究をまとめるにあたり助言をいただいた委員会の松田茂樹、汐見和恵、土谷みち子、下関千春、坂本有芳各氏の協力にお礼申し上げます。

注記

- 注1 本稿は独立行政法人福祉医療機構の平成15年度子育て支援基金を受けて、（社）全国私立保育園連盟により設置された委員会でもとめた報告書『保育園ははぐむ関係性に関する調査研究—子どもが他者と関わる力をはぐむ保育環境と家庭環境—』の調査データを対象に再集計と分析を行った。
- 注2 注1で既述の機構の助成を受け、個人のデータを多分に含む調査であるため、回答園の特定要素となりうるとして所在地域は知らされていない。また、分析にあたっては公設・民設の間に特に重要な差が見られない点は説明を割愛した。
- 注3 クラス別の「その他」はタテ割り等のクラスを示す。
- 注4 クラス主任またはそれに類する1人を各クラスの代表として集計した。
- 注5 保護者の保育施設全体に対する満足度と午睡・食事スペースのとり方とのクロス集計により得られた結果であり、直接スペースのとり方に対する満足度を聞いたものではない。
- 注6 今回の調査では両者を区別していない。

参考文献

- 1) 桑戸大雄：「保育園リニューアルのすすめ」、簡井書房、2000.6
- 2) 中央設計保育施設チーム：「園舎改築のアドバイス」、簡井書房、1993.11
- 3) 山田恵美：「地域づくりからみた保育園の地域開放空間に関する研究」、2000年度修士論文（千葉大学）

[2004年9月26日原稿受理 2005年2月23日採用決定]